

チリの鮭の養殖（その二）

稲宮 健一

その一で（株）ニチロがチリで初めて海面養殖を成功させたことを述べた。JICAとチリ水産庁合同の日本チリ・サケプロジェクトはコジヤイケ付近に多数の試験設備、孵化設備、養殖設備を備える近代的な水産養殖センターを設立して、そこに日本からトップレベルの魚病や、餌などの科学者をJICAが派遣した。ニチロが一九七九年には始めた養殖の成功の知らせを受け、チリではこれを国内産業化しようと動きが始めた。養殖の活動は公開されているので、地元で二番手が現れるものだが、ここで乱立を避け養殖をチリの国内産業として育成するため、半官半民のチリ財団が上手にチリ内の調整を行った。

チリ財団が本格的にサケ産業に参入したのは一九八一年である。そして、養殖鮭が産業として成立するための鮭の種類や養殖の規模など検討して、採算性が高くなる条件などを検討していた。この時、チリ財団傘下のサルモネス・アンタルティカ（南極の鮭）社のサケ・プロジェクトと、日本チリ・プロジェクトの出会いがあった。その一で引用した、北海道に研修に来ていたバブロ・アギレラとチリ財団の首脳が大学の同級生だったこともあり、両者の協力が始まった。

チリ財団の子会社サルモネス・アンタルティカ社は一〇〇〇トン計画を策定して、一九八五年に社員二五人、一九八八年に六三〇人に成長し、一〇〇〇トン計画は達成された。チリ財団は一〇〇〇トン計画を達成した後、事業を民間に売却することにした。国際入札の結果、日本水産（ニッスイ）が事業を買収した。

ニッスイでは付加価値の高い加工品の生産も手掛けた。加工技術も日本企業の貢献が大きかった。チリから日本への輸出は一九八八年に一〇〇トン、九三年には三二〇〇トンに達し、二〇〇八年時点で、日本への輸出は一八万トンで、この流れによって、現在スーパーではチリ産鮭が多数並んでいる。但し、チリ産に関して、少し気になる記事が散見されているので、その三で述べる。

参照・細野昭雄「南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち」二〇一〇年、ダイヤモンド社出版